

# 一本のかきの木

小川未明

青空文庫



山やまにすんでいるからすがありませんでしたが、そのからすは、もうだ  
 いぶん年としをとつてしまいました。若い時分わかじぶんには、やはり、いま、  
 ほかの若いわかからすのように、元氣げんきよく高い嶺たかみねの頂いただきを飛んで、目め  
 下したに、谷たにや松まつばやし林やしや、また村むらなどをながめて、あるときは、も  
 つと山やま奥おくへ、あるときは、荒波あらなみの岸きしを打つ浜はまの方ほうへと飛んで  
 いき、また、町まちの方ほうまで飛んでいったことがあります。  
 どんなに強つよい風かぜも怖おそろしくはありませんでした。身みを軽かるく風かぜに  
 委まかせて、木の葉きはのように空そらへひるがえりながら、おもしろ半分はんぶん  
 に駆かけたこともありました。太陽たいようのまだ上あがらない、うす暗くらい  
 うちから、そして星ほしの光ひかりが見みえる時分じぶん、空そらを、鳴ないていったこと

もありません。

その鳴き声なごえに、眠ねむっている林はやしや、森もりや、野原のほらが目めを醒さました。中なかには、「元氣げんきのいいからす。」といつて、この早起はやおきのからすをほめました。

ほんとうにこのからすは、若わかい時分じぶんは、元氣げんきのいい幸福こうふく者しやであつたのです。けれど、いまは、からすは、もう年としをとつてしまいました。そして、だんだんつぱさと翼よわも弱よわつてくれば、また目めもよく見えなくなりました。

それは、山やまに大雪おおゆきの降ふつた、ある寒さむい日ひのことでありました。この年としをとつたからすは、ほかの若わかい者ものが、村むらの方ほうや、また、海うみの方ほうまで出でかせぎをしにいったのに、自分じぶんは、ひとり木きの枝えだに止と

まって、つくねんとしていました。ちょうどそのとき、雪のため  
 に餌がなくて、ひもじがっているわしが、このからすを見つけた  
 した。

からすは、寒さと疲れに、目を半分閉じていますと、ふいに、  
 空のあちらから、異様の響きがきこえたのです。からすは、この  
 音を聞くと、思わずぞつとしました。よく遠方のかすんで見え  
 ない目で、じつとその方を見ますと、たしかに、日ごろからおそ  
 れているわしが、自分を目がけて飛んでくることがわかりました。  
 からすは、命のあらんかぎり逃げようと思いましたが、しかし、  
 海の方へいっても、また、谷の方へいってもだめだ。これは、村  
 か町の方へゆくにかぎると思いましたが、なんでも人間のいると

ころへゆけば、わしは引つ返してしまふだろうと思つたからです。  
からすは、里の方をさして、いっしようけんめに飛びました。  
雪まじりの寒い風は、はげしく吹きつけました。翼は破れてしま  
いました。そして、怖ろしい、大きな羽音は、だんだん迫つてく  
るような気がいたしました。からすは、もはや、命が助からない  
ものと思ひました。しかし、このとき、はるかあちらに、人家の  
ところどころにある村が見えたのです。からすは、悲しそうな声  
で鳴いて、救いを求めながら村の森へ下りてきました。  
わしは、人家を見ると、急に、からすを追うことをあきらめて、  
山の方へ引きかえしてしまいました。からすは、ようようのこと  
で、命は助かりましたけれど、翼は傷ついて、体は、うえと寒さ

のため、綿わたのように疲つかれて、木の枝えだにしつかり止とまっています。けの気きりよく力ちからもなくなつてしまいました。気きがゆるんで、そのままばかりと、からすは、下したの真まつ白しろな雪ゆきの上うへに転ころがり落おちてしまつたのです。

この村むらの少しょう年ねんが、ちようど、そのとき、森もりへ枯かれた枝えだを拾ひろいにきました。そしてこのからすを見みつけました。

「かわいそうに、羽はねがたいへんに傷いたんでいる。なにかに追おわれて逃にげてきたのか、それとも、病びよう気きなのだろう。」と、少しょう年ねんは、からすのそばに寄よつてきて、羽はねをなでながらいいました。少しょう年ねんは家いえに引ひきかえして、まだつきたての柔やわらかいもちを持もつてきて、小ちひさく幾いくつにもちぎつて、それをからすに与あたえました。

からすは、それを食べるたると元氣げんきづきました。そして、少しょうねん年ねんが枯かれ枝えだを集あつめて家うちへ帰かえる時じぶん分ぶんには、もう、からすはどこかへ飛とび去さつてしまつた後あとでありました。

からすは、少しょうねん年ねんの恩おんに深ふかく感かんじました。その冬ふゆも無ぶ事じに過すぎて、あくる年としになりますと、ある日ひ、少しょうねん年ねんは庭にわでからすがしきりに鳴なくのを聞ききました。見みると二羽わのからすが木の枝えだに止とまつて、一羽わのからすが地ちになにか埋うめていたのでした。その日ひも過すぎて、幾いく日にちかたつうちに、雨あめが降ふつて日ひの光ひかりがそこを暖あたたかに照てらしますと、一本ほんのくるみの木きが芽めを出だしました。そして、日ひにまし大おおきくなりました。少しょうねん年ねんは、その木きを大だい事じにしました。秋あきのころには、一尺しゃくばかりになりました。それだのに、冬ふゆに

なつて雪ゆきが降ふると、その木きは根ねもとから折おれてしまいました。

少しょう年ねんは、たいそう悲かなしみました。すると、また、ある日ひの

こと、庭にわでからすがしきりに鳴ないていました。見みるといつかのよ  
うに、二羽わのからすが、木きの上うえに止とまつて、一羽わのからすが、ま  
たなにやら地ちに埋うめているのです。

今こん度は、そこからかきの木きが芽めを出だしました。少しょう年ねんは、地ち

にかきの種たね子をまいたのは、いつかの哀あわれなからすであつた、木き  
の枝えだに止とまつていた一羽わのからすが、あのからすともと友ともだちか、さ  
もなければ子こ供どもたちであらうと思おもいました。少しょう年ねんは、このか  
きの木きをいたわりました。冬ふゆになると棒ぼうを立てたて倒たおれないように  
してやりました。二、三年ねんのうちには、そのかきの木きも、だんだ

ん目だつて大きくなりました。

いつしか、少年は年をとつて大人になりました。この人は、大きくなつても、やはりあわれみの深い、しんせつな人でありましたから、村の人々からも慕われました。そして、この人にもかわいらしい子供が産まれました。

その時分には、かきの木も、太く大きくなつていました。

そして毎年、たくさんの実を結びました。

「このかきの木は、からすが植えてくれたのだ。」と、昔の少年で、いまのお父さんは、子供らに向かつて話しました。

「どうして、からすが植えたの？」といつて、子供らは問いました。

むかし しょうねん  
昔の少年であつた、いまのお父さんは、むかし  
こども  
しく子供らに話して聞かせたのです。

そして、

「そのからすは、もうとつくに死んでしまつたのだよ。」といわれ  
れました。

あき  
秋になると、かきの木の実がたくさんになります。村の子供ら  
あつ  
がみんな集まつてきて、そのかきをもいで食べました。

そして、あとは木に残しておく、あの哀れなからすの子供ら  
まじ  
や、孫たちが、山からやつてきて、木に止まつて食べたのであり  
ました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1921（大正10）年9月

※表題は底本では、「一一本《ぼん》のかきの木《き》」となっています。

※初出時の表題は「一本の柿の木」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：雪森

2013年4月10日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一本のかきの木

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>